

## 《第 42 号》「子や孫に福島の大地をきれいにして返すまでたたかう」

根本 敬(福島県農民連 事務局長)

新米の予備検査で国の暫定規制値と同じ1キロ当たり500ベクレルの放射性セシウムが検出された福島県二本松市で、稲作農家の間に動揺が広がっている。500ベクレルの値が出た二本松市の南東部の小浜区(旧小浜町)は山あいの純農村地帯で、稲作農家611戸、水田面積は112ヘクタール。1戸平均 20aにも満たない。多くの農家は家族と親戚で食べ、残った分を農協に出すという農家だ。そこのマスコミ・メディアが殺到する。山あいの村は、騒然となる。その田んぼの持ち主の農家が、テレビカメラに晒される。コメントを求められる。答えようがないではないか。なんの罪もない人間を問い詰めてどうなるの。まず、取材しコメントを求めるべきは、東京電力の社長と野田総理でしょう。

肉牛の時もそうだった。被害者である農民が、「加害者」に仕立て上げられる。二本松市に対しコメを出荷しないよう求める内容の電子メールが相次いで寄せられている。内容は「コメを出荷しないで欲しい」「なぜコメを作ったのか」といった趣旨のものが多く、中には「汚染されたコメは自分たちで食べるべき」といったものまであったという。

農家は、これからもっと困難な課題と長い時間向き合わざるを得ない。「これから何年もコメは作れないかもしれない」「お金の補償だけではすまない。我々は客の信用をウソなった。今は先が見えず、希望をなくした状態」などの声にどう東電や政府は答えるのか。そのことを切り込むのがマスコミ・メディアの責任だろう。

放射能汚染に、「風評被害」はない。原因は、「レベル 7」の東京電力福島第一原発の過酷事故。この事故で飛び散った放射性物質が大地と農作物を汚染したこと。その償いはすべて、東電と国が果たすこと。

76歳の農民が東電への抗議行動を終えてこう語った。「子や孫に福島の大地をきれいにして返すまでたたかう」と。v

以上